

心に残る保育（２）保育者との関わりを中心に

○木村昭代 斎藤永子 小野正義 内海暎子 小野寺 昭 松原靖子
(聖和学園短期大学)

1. 研究目的

心に残る保育（１）で報告したとおり、心に残っている今でも忘れられない思い出の記述の中には保育者との関わりをあげたものが多かった。ここでは子どもに人的環境として最も大きな影響を与える保育者に焦点をあて、事例を通してそのあり方を考察する。

2. 方法・対象

「心に残っている今でも忘れられない思い出」について、自由記述してもらった中から、保育者との関わりについて取り上げ、その内容を分析、考察した。対象は短大保育科学生130名

3. 結果と考察

事例を印象ごとに区分した結果、次のように分類した。

< (+) の印象 >

- ・先生のやさしい対応
- ・悲しい出来事をよい思い出に変えた先生の対応
- ・寂しさを和らげる先生の対応
- ・先生にほめられた、認められた
- ・先生が喜んでくれた
- ・先生を尊敬する

< (-) の印象 >

- ・先生に叱られた
- ・納得のいかない理由で叱られた
- ・先生の不用意な、心ない対応
- ・先生が私の気持ちを分かってくれなかった、気付いてくれなかった
- ・過度の負担
- ・お弁当・給食の指導

以下事例をあげて考察する。

(1) 先生のやさしい対応

（事例１）ハンカチを忘れてきた私にそっとハンカチを貸してくれ、「明日はちゃんと持ってこようね」とやさしく言ってくれた先生のことが忘れられない。

（事例１）は、やさしさが心に響くしつけの方法の良い例といえよう。他の事例からも、子ども一人一人と向き合う保育者の姿が浮き彫りにされた。日々の保育の中で、何でもない一言、ちょっとした心遣いや励まし、そして保育者の笑顔が子どもの心にしみて、心にやすらぎを与えている。

(2) 悲しい出来事をよい思い出に変えた先生の対応

保育者のやさしい対応の中でも特に、本来ならば悲しい思い出になったであろう出来事が、保育者の思いやりで強い喜びの印象に変わった、心にじーんとくるうれし

い思い出に変わった例もある。

（事例２）小学校を訪問する機会があった日、登園するバスに酔って吐いてしまい、園に一人残されたのは悲しかったが、お陰で先生と二人でいろいろとお話のできたのでうれしかった。

（事例３）足を骨折して遠足に行けなかったとき、先生が家に来て絵本をくれた。先生が自分一人のものになったようでうれしかった。

先生との1対1の時間は、偶然のわずかな時間の触れ合いであっても、先生が私一人の、私だけの先生になったときであり、ことに悲しみや、さびしさの中にいたときにやさしい触れ合いを持ったことは、心に焼き付いて大切な思い出となっている。

(3) 寂しさを和らげる先生の対応

保育園で夕方親の迎えを待っている時、お泊まり保育で家族と離れたとき、心細く寂しい気持ちを先生がお母さんのように心を温かくしてくれたという事例が記述されていた。保育者のやさしい心遣いとスキンシップの大切さが伝わってきた。

(4) 先生にほめられた、認められた

発表会、運動会等の行事の時、製作活動その他いろいろな場面での思い出があげられた。ほめたり、認めたりすることが子どもに自信をつけ、喜びを与え、成長させる大きな力になることを改めて保育者は心に留めておきたい。子ども一人一人を認め、良いところを伸ばす保育が益々広がることを期待したい。

(5) 先生が喜んでくれた

「先生に紙で作ったバッジをあげたら、数日間胸につけてくれた」「肩たたきをして喜ばれるとうれしかった」など、子どもらしいうれしい気持ちがうかがえた。

（事例４）年中の時、内気だったので先生と仲良くなりたいのに自分から話しかけることができなかった。そこで話せない分、先生の肩たたきをしてあげたところ、先生は「Sちゃんは肩たたきが上手ね」と言ってくれた。その一言だけで、すごくうれしくなり、毎日肩をたたいてあげた。

その一言だけで、その後どんなにか先生を身近に感じることができたことであろう。先生が好きで仲良くなりたいのに言葉に出して言えない子がいる。何気ない行動や素振りですれをキャッチし、温かい言葉を掛けることが、“心のかげはし”となるのである。

(6) 先生を尊敬する

クラスに嘔吐しやすい子がいて、先生の子への対

応やさりげなく片付ける様子を見て、先生って大変なんだなと感じていたり、お泊まり保育をたった4人の先生だけで行った働きぶりを尊敬したり、子どもは保育者の姿を大変よく見ている。言葉では表現できないが、その姿をしっかりと心に焼き付けるのである。

(7) 先生に叱られた、納得のいかない理由で叱られた

(事例5) 男の子がしつこく「結婚して」とか言ってきたので思わず叫びてしまった。男の子は泣いてしまった。それを見ていた先生はその場では怒らず、帰りの集まりの時に私ひとりだけ立たされ怒られた。すごく悲しかった。私なりの理由を知ってほしかった。

言葉で上手に伝えられないで、本当の理由や気持ちを理解してもらえなかったこと、悪気はないのに悪くとられて、誤解されて叱られたり、悪いと思わないのに叱られたりしたことの悔しさ、悲しさを詳しく書いた事例ばかりであった。子どもの一方が泣いてしまったときや、保育者がしつけとして叱るべきだと思ったときでも、保育者は一歩立ち止まって、冷静に話を聞くことが大切である。

また叱るときには他の子どもの前で叱らない配慮も必要であろう。悲しい思い出として心に残るようなしつけの方法や叱り方は、避けるべきではないだろうか。叱るという行為について常に自分を省みる必要性が再認識された。

(8) 先生の不用意な、心ない対応

(事例6) 年少組の時、しゃべらない私が、先生にみんなの前で「あなたにはお口がないのですか」と言われた時、恥ずかしく、悔しく、悲しかった。この時の情景が忘れられない。

保育者の不用意な言動が、特に心ない言葉が子どもにとっては忘れたい出来事になって心の傷になってしまうことを、心に銘じておかなければならない。

特にしつけという名目で、保育者が陥りやすい場面である。子どもの方は皆の前で恥ずかしく、悔しく、悲しい、たくさんの嫌な思いを胸一杯に抱え、胸がつぶれそうな思いに耐えている姿が浮かんでくる。

また特定の子としか遊ばない先生、特別かわいがっている子がいる先生の事例もあげられ、先生に不信感を持ち、楽しくない園生活が書かれていた。子どもはよく見て感じとっているのである。

保育者に寄せる子ども一人一人の信頼にこたえ、それを裏切るような言動は厳に慎むべきであることを、今更ながら痛感した。

(9) 先生が私の気持ちを分かってくれなかった、気付いてくれなかった

大人から見ればささいな出来事だったり、やむを得な

(事例7) お遊戯会の後、私の役だけお面や道具がなかった。終わって先生に「記念にお面や道具を大切に持って帰って」と言われ、何もなくて泣いた。

いことであったりすることについて、子どもにしてみればこうしてほしかった、なぜそうなのか分かってほしかったと言う気持ちが語られていた。言葉で言い表せないもどかしさも伝わってきた。

(10) 過度の負担

(事例8) 夏休みについての先生からの注意を次の日に紙に書いて提出する宿題があった。家に帰ったら内容をすっかり忘れてしまい、母と一緒に考えたことを書いて提出した。

子どもに一段階高い課題を与えることは、必要なことである。その課題を成し遂げたときの喜びは非常に大きいものであることは、よく知られている。そのような場合、適時性を考えて慎重に課題を選ぶことと、失敗をしたとき適切な援助を配慮しておくことが大切だと感じた。

(11) お弁当・給食の指導

(事例9) お弁当の時間、食べ終わった人から先生に見せに行くというのがすごく嫌だった。このことから登園拒否をおこした。

楽しいはずのお弁当・給食の時間が、嫌な思い出となっているのは大変残念なことである。食事指導はどうあるべきか、保育者にはもう一度考えてほしい課題である。

4. まとめ

以上の結果から、保育者として大切な事項を再認識することが出来た。一人一人を温かい目で見守り、信頼関係を深める保育者が必要とされている。以下に、本研究

(1) (2)を通して得られた保育者に求められている事項をまとめた。

- 1) 子どもと保育者が1対1になった時を大切にす
- 2) 子どもが悲しんでいるときの心遣い、気配りが大切である
- 3) 子どもの話をよく聞き、しつけは嫌な思い出とならないように配慮する
- 4) 楽しいお弁当・給食の時間を心がける
- 5) 楽しい行事の工夫をする
- 6) 望ましい人格向上への努力、豊かな人間性が求められる

学生にとっては、幼稚園・保育園(所)時代の体験を意識化することによって、将来の目標を再認識し、さらに自分の目指す保育者像を明確に把握する機会となった。自己認識の深まりは、人への共感的理解や洞察力を深める役割を果たしてくれると考える。